名古屋女子大学　紀要　37（人・社）219～229　1991

国際理解と英語教育

野村夏治

English Teaching and Cross-Culture Understanding

Natsuji NOMURA

1．外国語と文化

L．ヴィトゲンシュタインは，『哲学探究』において，「一つの言語を想像するということは，一つの生活様式を想像することにほかならない」[1]と述べたが，このように，言語は生活様式，したがって思考様式と密接に結びついているのである．外国語を学習するということは，母国語と違った思考様式を獲得することである，と一般に言われているのは，このためである．

国際社会の中に生きていくためには，我が国だけでなく外国の文化と伝統に対する関心と理解を深めることが大切である．もちろん外国語の実践的な能力を身に付け，コミュニケーション能力を高めることが必要があるが，それとともに外国の人々との相互理解を深めることも必要である．

現今，国際化の急速な発展がみられ，「国際理解」から「国際交流」へと国際社会が変化している中にあって，物の見方や発想・理論の展開の仕方などについて，外国語を通して，もっと積極的に習得することが必要である．英語教育においては，文章の構造（discourse structure）の学習とともに文化の型（cultural pattern）の学習も大切である，ということになる．英語で言われていることは，英語文化の価値体系の表明であるからである．

文化は人間が作ったものであり，文化は「一民族の暮らし方の総体，個々の成員がその集団から得る社会的遺産」を指すと考えることができる．個々の社会は独自の価値体系を持つことを認めて，文化間に優劣の差を認めず，人間の経験や考え方が多少とも文化によって決定されることを認めるのが文化相対主義である．この考え方は，外国語教育の一つである英語教育においても具体的に生かされるべきである．つまり，英語文化圏の文化が特に優れているという立場に立つべきではなく，題材として特定の国，イギリス・アメリカだけを取り上げるべきではない，ということである．世界にはいろいろな文化があり，人間の習慣や思考様式の多様性について教えるのが望ましいのである．

文化に対するアプローチにはいろいろな仮説があるが，文化は学習されたものであると考えることができる．小林薫は文化を次のように分類している．[2] 1．遺産　2．風俗・習慣　3．生活様式　4．行動様式　5．思考様式・発想法　6．価値観・価値体系の6つである．ところで，このような文化を作り出す過程における人間の精神構造とか認識過程について考えてみると，非言語的な側面（例えば知覚スタイル，動機づけのパタン）と言語的な側面（例えば意味付けや信念を表わす言語構造）があり，この二つの要因を比較研究すれば，文化の特質が明

確になってくる．

文化とコミュニケーションの関係について言えば，コミュニケーション活動は，人間の行動様式，行動規範などに対して示される言語伝達だけでなくて，身振り，目の動き，顔の表情，姿勢，聞き手との距離等の非言語伝達（ノンバーバル・コミュニケーション）を含んでいる．それは文化による型付けを受けているのであって，その解読は，言語の場合と同様に，文化理解の重要なかぎを握るのである．

ところで，私たち日本人同士でも，互いの意志疎通がうまくいかないことがよくある．人に自分の考えを伝えるためには，聞き手にとって最も重要な情報は何かを知るとか，聞き手がこれで理解してくれるかどうかということを判断する，という能力をもつことが必要であって，この能力は単語や文法規則を知っていることとは別種の能力である．[3] 人と上手に話をするためにはコミュニケーションの技能を高めることが必要である．

相手が外国人である場合，意志疎通の困難が大きいことは言うまでもないが，その原因は，相手の民族特有の考え方，感じ方が分からないからとか，相手の外国人の人柄が分からないからとか，言葉以外の問題であることが多いのではなかろうか．

人は皆生まれついてこのかた文化の一定の枠にはめ込まれているのに自らはその意識を持っていないのが普通である．相手と話す場合，相手のことがよく分からないままに，自分の考え方のほうが正しいと信じ切って話を進めるのではコミュニケーションが十分成立し得ないのは当然のことである．実際，私たちは，一般には，各自が色眼鏡をかけて相手を見ていると言ってよい．私たちは，自分たちが正しいと考えてきて，これが戦争，迫害，奴隷制，排他主義などを生んできたことを知っている．自分の偏見を異国の人々への判断へ持ちこまないようにすることが，教育の主たる目的の一つでなければならない．

異文化間コミュニケーションについて先駆をなしたエドワード・ホールは，アメリカ人がとかく自己文化中心主義に陥りがちであり，彼らが外国の人々とうまくいかない理由の大半は異文化間のコミュニケーションに関する無知にあると述べたあと，事例として，アメリカ側がギリシア側と交渉を進めようと努力してもうまくいかなかった理由の一つは，ギリシア人にとっては，率直さは繊細さの欠如を示すものとして困ったことだと考えられていること，さらに，アラブ人との交渉では，アラブ人の間では，将来を見通そうとする人間が精神に少しく異常をきたしているものと考えられていることが私に分かったのは，後になってからであった[4] ことなどを述べている．アメリカ人が将来の収穫予想を尋ねたのは，自分が気がふれていると思われたにちがいない，ということで，このアラブ人は屈辱を感じたというのである．

2．カルチャー・ショック

カルチャー・ショック（culture shock）とは異文化に接したときに受ける衝撃のことである．これは比較的新しい言葉であるが，ラフカディオ・ハーンが，日本人の，最愛の者の死に直面してもなお笑顔を絶やさないのを見たときに受けた衝撃も，この言葉で説明できよう．ハーンは，「日本人の微笑（*The Japanese Smile*）」を1894年（明治27年）彼の最初の著作『知られぬ日本の面影』*Glimpses of Unfamiliar Japan*の中に書いたが，これは最も卓抜な日本人論である．彼は路傍の石地蔵に優しい無心の微笑を見出し，自己抑制の表われの微笑を理解するには日本の古い，自然の庶民生活を理解しなければならないとしたのであった．[5]

シュバイツアーが，アフリカの生活で，戸棚からピアノの楽譜等がなくなっているのに気付いて，「何にでもいつでも錠が必要で，歩いている鍵束にも等しい」と嘆いたのも，カルチャ

ー・ショックであった.[6] 矢野暢（京大）は，南タイで，ご飯に生卵をかけて食べ始めたら，「タイの歴史でそんな野蛮な飯の食い方としたのは，お前が最初だ．卵は生きている．食べてはいけない」と叱られ，文化ショックを受けたと言う.[7] 生卵ご飯を食べるのは日本人だけらしい.

私たち日本人が西欧文化を吸収するため外国へ出かけていくようになった明治以降のことについて考えてみると，外国生活に対する適応のあり方について次の三つのタイプに大別することができるであろう．第一は夏目漱石タイプである．このタイプは性格的に外国生活に向かないのか，ノイローゼ気味になり，劣等感に襲われる．しかし，やがて相手の欠点が目についてきて，両文明の間で苦しむ．漱石は『倫敦　消息』(1901) に（外国人で）英語ができなければ頭の中まで幼稚ではないかと母語としての英語の使い手が考えたがる,[8] と指摘している.

第二は森鴎外タイプであって，日本の良さも西洋の良さも積極的に取り入れて巧みに適応し，国際化社会に十分活動できる人である．鴎外も漱石もともに異文化に接して日本の良さを認識したのであるが，その対し方はすっかり違ってしまった．第三は森有正タイプであって，西洋で暮らしてみなくては何事も始まらないとする実践派である．彼は留学の期間が過ぎても帰国せず，結果的には東大助教授の職を捨ててまでして自らの内的必然に従い，自らに忠実に生きるためフランス在住を続け，西洋の内側から生きたのである．もっとも，彼は，日本を捨てながらもときとして里帰りして「日本回帰」を行ない，日本人であることをやめることはなかった．彼は，国際人であり，日本人であったと言える．このタイプは異国文化に魅惑される外国一辺倒とも言えるタイプであるが，これからはこのタイプの若者が新しい国際人として活躍することになるのかもしれない.

ところで，この第二の積極型のタイプは，相手の文化の慣習にほとんど盲目的といってよいほどに従う人々なのである．そしてこのタイプの人がまた同時に自らの文化についての優れたメッセージの送り手にもなるうるのである．イギリス大使館二等書記官フランシス・コナーさんもこのタイプの人のようである．コナーさんの話によると，コナーさんがインドから日本へ赴任し，京都の旅館に泊まろうとして入口に立ち，中へ入ろうと努力したが，どうやっても戸が開かず，通りかかった人に開けてもらったという．ドアは引いたり押したりするものであるというそれまでの自分の物差しですべてを計るのではなく，横に引くドアもあるのだと一つの経験をし，自分だけの物差しを恥じたという[9] ことである.

このようにドアの構造の違いもカルチャー・ショックの一因となりうる．C・ディケンズの『クリスマス・キャロル』では，幽霊が出入りするとき窓は上下に開閉する．日本のドアはスペースが狭いからかよく外開きになっているが，欧米のドアは内開きになっている．外開きのドアは欧米人には恐ろしく危険この上ない．ドアが内開きであれば，いざというときには建物の中に立てこもって，ドアを内側から押えて，敵の侵入を防ぐことができるのである．欧米のテレビや映画では，犯人が閉じ込もっていると思われる部屋に向かって，警官が体当たりをして押し入る場面が出てくるが，あれは欧米のドアが内開きになっているからである.[10] 彼らは，現在も，レストランでは，壁を背にして表の方を向いて座るのである.

異文化に接したときに体験する心理的葛藤状況は個人によってその時期・期間・程度に差があるが，ほとんど例外なくカルチャー・ショックは体験するのである．なかには，このショックを克服できないままそれがストレスとなり，異文化への拒否反応が続き，ついには不適応症状を引き起こす人もある．我が国も急激な国際化のため帰国子女の数が増えているが，その中には帰国後日本の生活に適応できない生徒もかなりいると言われている．また，適応させるた

めの手段，いわゆる「外国剝がし」についても議論がなされている．

カルチャー・ショックは一種の個人内コミュニケーションなのであって，自己との対話を通して真剣にこれと直面する人だけが，異文化の持つ深い側面に到達できるのである．

3．思考・発想様式と表現構造

社会学の用語にマージナル・マン（Marginal Man）というのがある．これは，「性質が異なる二つの文化に属しているが，どちらにも十分には同化していない人」のことであり，「異文化に触れてアイデンティティの危機を感じている人」のことである．例えば，同化不十分な移民を指し，「周辺人」とか「境界人」と訳される．彼らは，所属する世界の二元性のために自我が分裂し，したがって行動に一貫性がみられず，心理的にも不安定である．かってヨネ・ノグチはこれと似た精神状況におかれた自分を，自嘲的に「二重国籍者」と呼んだという．[11]

次に取り上げる吉川宗男の「日本とアメリカの文化特性[12]」は，彼がマージナル・マンとして苦闘した後に達した貴重な報告である．彼は日本生まれで，現在はハワイ大学専任教員であるが，次のように述べている．

> 「私はこれまでの人生サイクルを振り返ってみると，いくつかの異なった段階を経てきたことがわかる．（中略）第三段階は再びアイデンティティの危機に襲われる時期で，この段階ではどちらの文化にも場違いで入りこめない感じをもち，これを通過すると適応良好という最後の段階が生じて人間のサイクルが一巡する．私自身は現在第四段階にいて二つ文化双方に帰属意識を持ち，二文化の特性をよく理解している思う．」

彼は，「ハワイのおかげで現在の私があり」，「共感性豊かな東洋型の自己と開放的な西洋型の自己の二つの自己を持つ」と言う．彼は境界人としての体験について語っている．彼のような人こそ二重言語人であり，二重文化人であると言えよう．

このような人は別として，普通私たちは，英語に限らず，外国語を本当に理解できたという自信をもつことは困難ではないかと思われる．それは，つねに，なにがしかの不透明，未解決なものを残している[13]からである．

英語を読むとき，直読直解という母国語の読みに近くなることが理想であり，それは私たちの目標である．ときとしてはこのような状態に達することもあるが，普通は，日本語が不即不離の関係でつきまとうことが絶対なくなるという状態にはなかなかならないものである．言葉をかえて言えば，外国語の学習者にはその外国語と母国語の背景となっているそれぞれの文化の対立が強く意識されていて，頭の中で二つの言語が互いに干渉し合っていると言えるのである．外国語の学習者は，心理的に不安な，一種のマージナル・マンなのである．

ある文章の内容を理解しようとするとき，その内容はその文章の示すコンテクストの中に示されている．コンテクストとは，文脈，場面，文化等とともに生じている言語記号のことである．同じような意味を表わす英語と日本語の二文があるとすると，これはコミュニケーション論の一つの部門ということになろうが，その両者をつなぐコードは共有されていないのが普通である．英語に熟達している人はコードを共有していることになるが，コードの背景のコンテクストとなると，私たちにはよく分からないのである．例えば，レーガンさんはよくcrusade「十字軍」と言ったが，その背景にあるコンテクストとなると，西洋史で少し習ったくらいでは，私たちには十字軍という言葉を聞いて心が踊るというような気持ちは共感できない．要するに，

その文章の伝えるメッセージが違うのである．

どうして違うのかということについて，アメリカのナイダ（E.Nide）という翻訳論の専門家が用いた説明図を柳父章が取り上げている．図1はナイダが一般理論として説明したもので，M_1は英語，C_1はヨーロッパ文化，M_2は日本語，C_2は日本文化として，例えば聖書の翻訳はどのように理解されるかについて述べている．[14] 柳父の説明によると，この図から比例関係が成り立つという．比例関係が成り立つというのは決してイコールではないということである．

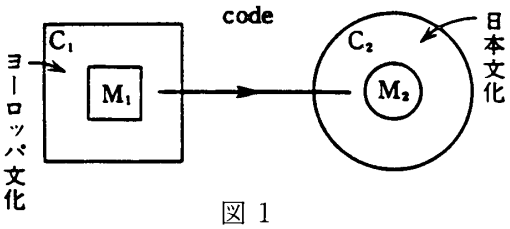

図 1

柳父はそれに続けてsheと「彼女」について論じている．柳父の言うとおり，「彼女」は，日本語のコンテクストの中では浮き上がった言葉であり，「女の人」とか「お母さん」と訳してはじめてその果たしている機能がよく似てくるのである．

日英語の比較考察のうち「言語の性格」についての楳垣実の研究[15] を挙げてみよう．彼によると，英語の「中心点」は「主体の行為」，日本語の「中心点」は「場面，雰囲気」であり，「表現原理」は英語は「論理性，抽象性」，日本語は「気分性，具体性」であり，「表現形式」は英語は「遠心的，外向的」，日本語は「求心的，内向的」であり，「表現性格」は英語は「動的，積極的」で，日本語は「静的，消極的」である．

日英語における思考・発想様式の違いがどのように表現されているかについて例を挙げよう．アメリカの'*Remember Pearl Harbor!*'は，和訳では「真珠湾を忘れるな」となり，私たちの言う「動くな」は'Stay there.'に当たる．日本人は否定表現を好むようである．終戦直後の話に，アメリカの教育使節団に，島崎藤村の『千曲川旅情の歌』の英訳したものを持って行って見せたところ，「これは何も書いてない詩ですねぇ」と言ったという．この詩の各句の末尾には打消しが多い．（「緑なすはこべは萌えず」「若草も藉くによしなし」）アメリカ人はこの詩を読み，何か頭の中に思い浮かべようとしても…ない，…ないという表現だから何も頭に残らなかったそうです．[16] 彼らにとっては，この詩には言葉としての論理は成立していないのである．私たちは「はこべは萌えず」と聞いただけで，反射的に，はこべさえ萌え出ていない，くろぐろとした，まだ春とは名のみの信州の風土を思い浮かべることができるのであるが，英語では土は黒いままであると表現しなくてはならないのである．もっとも，矢本貞幹は，この詩は音調を主とするため抒情詩としてのイメージを喚起しない極端な例であると言っている．[17] そのとおりであろうが，とにかく日本人は否定構文が好きのように思われる．

発想様式の違いについてもう少し述べよう．私たちは客に心遣いをして，「つまらないものですが」と言って物を差し出し，「何もありませんが，召し上がって下さい」と言うが，英語では'I hope you like it. 'と言う．私たちは謙そんして子供の自慢をしないが，アメリカの親は自慢する．（イギリスでは親同士は極力子供の自慢をしないのが良識ある態度と考えられている[18]）

次に，バイリンガルの人の一般的と思われる意見を挙げてみよう．「日本語では，強い意見をはっきり相手に伝えたいときに，ちゃんと言えない．英語ならすごく攻撃的になれるんです．でも日本語では同じことが言いづらいんです．」[19] 同じようなことが，戦争花嫁が二つの全く異なる言語世界に生きていて，日本語では日本女性らしいしおらしさで答えるが，英語で話す時の彼女たちはもう完全に考え方もアメリカ的になっていた，[20] という．「スペイン語を話すときの私は，力強く，独断的かつ情熱的になる．フランス語を使っていると論理に節目をつけたが

り，理屈っぽくなる．そして日本語を使う場合には，微妙な遠回しの考え方をするようになる．使う言葉によって，からだも筋肉も異なった状態になるのが，はっきりとわかる」[21]，という意見には私はただただ驚くばかりで，言語の特徴がたくみに表現されているとは考えるが，事の是否は私には分からない．このアメリカ人は言語の相対性を強く意識しているのであろう．

私たちが言語と文化のつながりについて強く意識するのは，原文と翻訳文の表現の仕方があまりにもかけ離れていると感じる時や，ある単語が他の言語のなかに見出せない時である．語の表わす概念の違い，語句の持つ機能の違いは文化の違いである．翻訳では，原文の持つ効果と同じような効果を生じさせようとするのはまず不可能に近い．精々のところ，思い切って意訳したり，回りくどい表現を使ったり，説明的な文章を加えたりするぐらいが関の山であろう．翻訳は根源的に文化の問題である．翻訳語として定着させられている言葉は，その底に文化の網の目を深く引きずっているので，注意して使用しなくてはならない．

4．語いと文化

人類学者クラックホーンは，「ある国語の語いを分析してみると，その文化の重点がどこにあるかがわかり，そこにその歴史が反映している．例えば，アラビア語には，ラクダ，ラクダの部分，およびラクダの用具について六千以上の単語がある」と述べている．[22] 日本語には魚に関する語が多く，ぶりの名称が成長段階によって異なることでも知られる．エスキモー語には抽象的概念を表わす「雪」という語はなく，具体的な生活上の用語だけがあるという．

日本語と英語の語いの意味のずれについて述べよう．日本語の「米，稲，もみ，ごはん」は英語では‘rice’であり，逆に「ムギ」は英語では‘wheat,barley,rye,oat’となる．‘door’は「ドア」「戸」「玄関」に当たるが，「ドア」は開き戸であるのに対して「戸」は普通は引き戸を意味している．‘cook’は「料理する」と同じではない．「火を使って調理する」という意味だからである．‘uncooked meal’は「火を使わずに作れる料理」で，例えばハムやサラダを主体とした食事のことである．「庭」には‘garden’も‘yard’も含まれる．‘garden’は「花，野菜などを栽培している土地」で，ただ芝生がしきつめてあるだけの庭は‘yard’という．[23]

「目を細める」という日本語は満足感や称賛の念を表わすが，英語国民の使う‘narrow one’s eyes’は反感や嫌気の気持ちを表わす．‘a narrow street’は「細長い通り」を意味するので，「運動場が（野球などをするには）狭い」は‘small’である．‘narrow’では「細長い運動場」になってしまう．「象は鼻が長い」は‘An elephant has a long trunk’.であるが，‘a long nose’は「高い鼻」であり，‘a long face’は「浮かぬ顔」である．「リンカーンは長い顔をしていた」は‘Lincoln had a longish face’.である．

単語の誤訳がときとして取り返しのつかない結果を生ずることがあるが，その最も著名な例は次の誤訳であろう．「黙殺する」には，(1)‘ignore’,or‘ to pay no attention to’ (2)‘make no comment’,or‘refrain from comment’の二つの意味があり，この後者を意味した「ポツダム宣言を黙殺する」という鈴木貫太郎内閣の回答が‘ignore’と訳されたために，日本に譲歩の意志なしと判断されたのである．黙殺という余韻を残す表現と，頭から相手にしないというニュアンスを伴った英語のignoreという言葉は，決してイコールではない．辞書の上ではイコールであってもイコールでないところを正しく理解しなくてはならない．そのためには自ら英語を使い，英語国民の発想法に通じ，彼らの価値観や国民性を広い視野から研究することが不可欠となる．[24]

きつね（fox）という語の日米でのニュアンスの違いについて西山千は次のように述べている．

アメリカで行われた日本に対する世論調査のなかでJapanを動物の例で想像したら何を連想するかという質問があった．もっとも多く答えられた動物はfoxであった．大使館のアメリカ人にfoxを日本について連想する場合，これは悪いイメージか良いイメージか聞いて回った．「大体良い」という答えが多かった．伝統的なきつね狩の時に利口なfoxが狩人から逃げるのに成功すると，そのfoxを祝福するという．[25]

語いの中にはその社会なり文化を特徴的に表わしているものがある．例えば，日本語の「義理」「人情」「さくら」「さしみ」「ゆかた」「仲人」「甘え」「恩」「遠慮」「贈り物」「風呂」「学歴」などが代表的な語と言えよう．英語にも，主としてアメリカに適するもの，主としてイギリスに適するものの区別はあっても，その二つの文化の特徴を表わしている語がある．

democracy, conversation, game, privacy, humor, joke, argument, gentleman, individual, independent, right, bilingual, rule, frank, multi-culture, courtship, ladyfirst, frontier spirit, speech, hero,success, women's liberation, liberty, freedom, jazz, hymn, witch, sin, gesture, meat, coffee, tea, canned food, car, business, party, spank, pet dog, do it yourself, football, queue, holiday, host, hostess, hippie, assignment, date, baby sitter, key, rose, dog-wood, volunteer, popcorn, sandwich, drugstore[26]

5．基礎色彩語について

言語と文化という研究課題には親族名称，忌み言葉と婉曲表現などもあるが，その中から色彩語いを取り上げる．色彩語は言語文化によって大きな違いがあるように思われる．例えば，虹の色は現在我が国では，赤・橙・黄・緑・青・藍・紫の七色であるが，英語文化圏では藍を除いた六色である．[27]ローデシアのショナ語では四色，リベリアのバサ語では二色に分けられ，[28]メキシコ原住民のマヤ族は黒・白・赤・黄・青の五色に分ける，[29]という．偶然だが，このマヤ族の五色は日本の昔の色彩語と同じである．『土佐日記』には「たつのくびに，五色の光ある玉あなり」があり，『竹取物語』にも「五色」という語があるという．[30]元来，我が国の五色の考えは，中国古代の五行説（青・黄・赤・白・黒の五種の色）から来たものであり，緑は青から分化していなかったのである．現在の日本語にはなおその当時の用法が残っているのである．日本語と英語の，青と緑の関係は，「青い空」は'blue sky'，「青信号」は'green light'，「青い草木，緑の草木」は'green vegetation'となる．

色彩語の用法には文化の違いが色濃く表われているから注意を要する．「赤い太陽」は英語では'yellow sun'であり，「青い海，青い川」と私たちは川の水を青とするが，英語文化圏ではyellowであり，中国でも黄である．実際に長江など中国の河川は茶褐色をしている．泥（mud）の色も英語ではyellowである．メルヴィルの傑作*Moby Dick*『白鯨』では，ピークォッド号がインド洋の南（喜望峰の南東）の果てしない大洋を航海するとき，船は，黄金色に熟した麦の穂の大平原を行くようであったと書かれている．海の色はyellow，goldenなのである．

ところでyellowにはいろいろのイメージやシンボルがある．『アンネの日記』には「ユダヤ人は黄色い星印をつけなければならなかった」とあり，黄はユダの裏切りを表わし，ユダヤ人差別に用いられたである．'purple'「紫」は英語では豪華で，皇帝・国王・枢機卿の衣の色であり，その地位や権力を表わすが，ブラジルでは「死，葬式」を連想させるという．これは，ギリシアでは紫は「華麗」な色とされたが，ローマでは，紫の衣は葬式に着る慣らわしであった[31]ことから推量されよう．あと2，3の例を挙げるにとどめたい．英語の'green apple'は「熟

した」リンゴのことであり，'to be pink'は「健康であること」を表わす．「ピンク映画」に対する英語は'blue film'である．

ここで言語の相対性と普遍性について述べておきたい．言語と文化・社会との関係に目を向けると，言語が人間の思考・認識とどのような関係をもつのかということが問題となる．結論的に言えば，この問題には二つの対立する考え方がある．言語の相対性を主張する人々にはヘルダー，フンボルト等があり，ふつうサピアーフォーフの「言語相対性仮説」と言われるが，この見方によれば，言語と思考の関係において言語に優位性が帰せられる．言語が違えば言い方が違うように，人はその思考，認識，世界観をまとめるのに言語に依存するとしている．これに対し，普遍性を主張する立場に立つ人は，個々の言語の間には形式の上で大きな差異があっても，人間は普遍的な論理を共有し，その認識にも基本的な共通性があり，言語自身にも，個別文法を越えた普遍文法というべきものが存在する，と説明しているのである．

言葉による色の表現は，先に述べたように，言語文化によって異なっているため，「言語相対論」を裏付ける材料として引き合いに出されることが多かったのであるが，1969年人類学者バーリンと言語学者ケイによる『基礎色彩語彙』によって，共時的に見るとバラバラに見える体系にも実は発達段階を考えると，普遍的な法則があることが明らかにされたのである．[32]

彼らの研究によると，第一段階では「白・黒」の二色で，第二段階では「赤」が加わり，第三段階では「黄」または'GRUE'（青と緑を含む）のどちらが先に出てくるかで二つの経路に分かれるという．ちなみに古代日本語の「クロ・シロ・アカ・アヲ」もその一例であり，「アヲ」は「緑」と「青」を含んでいた．その研究によると，「白・黒・青」のような三色での組み合わせは存在しなかったのであり，基礎色彩語は11個以内で，第四段階で「ブラウン」が現われ，さらに「紫」「ピンク」「オレンジ」「灰色」が現われるという．

この研究の成果は，私たちが概念として常々注意しうる色が人種や文化に依存しないことを示唆しており，概念としての対象認識に普遍性の一端を見ていることになるのであろう．（概念やその意味が，他の概念とのネットワーク関係のなかではじめて定義できるという考え方自体は，哲学や心理学などの分野ではもはや新しいものではない．）言語の普遍性を信じ，種々の言語間には，根底に，ある基本的な同一性が存在すると想定する立場に立てば，言語習慣や一定の言語による表現の形式が認知の仕方や感じ方をその言語構造の枠組の中で拘束しているにすぎないということになってしまう．

文化そのものがもともと普遍性志向と個別性志向という二重構造をもつものであることをここに指摘しておきたい．文化は様式とか言葉によるぬきさしならぬ個別性，もしくは特殊性の刻印を帯びさせられている．だが，その特殊性もしくは個別性とは，文化の一端をになう構成員たる自由な人間個人を縛りつけると同時に，決してそれ自体は自己完結的なものではないのであって，人間個人を常により広い，より普遍的な場に投げ出す作用をもっているのである．

6．ノンバーバル・コミュニケーション

大阪府・市の昭和58年度の英語科教員採用試験に，文化の違いのためどのような誤解が起こったかが書かれている英文を読ませて，「校長の判断について約60字以内の日本語で書け」という問題が出されたことがあった．その答えは，「アメリカ人は互いに相手の目を見ながら話すので，目を見ないのはやましいからと判断する」という趣旨のことである．その話は，15歳のプエルトリコ人の女生徒が中学校内で喫煙のかどで補導されたが，たまたま居合わせただけだった一人は否認し続けた．校長はこの生徒と面接して有罪としたが，保護者たちが騒ぎ出し，

再調査の結果無罪を認めたというものである．話はプエルトリコ人についてであるが，話す人の目を見る習慣がないのは日本人も同様であり，日本人の生徒にも同じことが起こりうることを示している．人は自分の国の慣習や価値判断を基準として，その先入観念から容易には抜け出せない，ということを，この話は私たちに教えている．

文化の違いは，このように，行動に現われる．身振りの違いを知っていることは大切である．ノンバーバル・コミュニケーションについての例をあげてみると，アメリカでは人々はほとんどしゃがむことをしないが，メキシコ人はよくしゃがむ．そのため，密入国のメキシコ人を探し出す手段として，パトロール隊は飛行機で南カルフォルニアの山々を低空で飛び，キャンプしている人々の中に座っているグループとしゃがんでいるグループを見分け，不法入国者を捕えるという．[33] 話し合うときの距離や空間の違いもある．ふつうアメリカ人は他人といるとき自分との間が2フィートぐらいあいていないと落ち着かないという．ラテン・アメリカ人の距離はもっと短く，彼らはもっと近づいて人と話をしようとするという．

私たちはよく子供の頭をなでて良い子だと言うが，タイなどでは，頭の上に神様がいるので大変な侮辱・失礼になるという．日本の女性がよくやる手を口のところへ持っていって口を隠すようなしぐさは慎しみ深さを示すが，自己主張を旨とする英米人には忌み嫌うゼスチュアとなる．日航で機内サービスをするスチュアデスがこのポーズをとっているポスターを発表したところ問題になって取り下げてしまったことがある[34] という．

なお，外国人教師が外国語学習において果たす役割―発音，身振り，動作などが大きいことは言うまでもない．

7．国際社会に生きる

近代化の波に乗って我が国が大きく変化したのはそんなに昔のことではないのであって，少し前までは庶民には名字がなかったのである．東南アジアでは，現在でも名字はない．インドネシアのスハルト，スカルノ，ビルマのネ・ウィン―これは名前であって名字がないのである．[35] こういう社会は，男女が対等で，長男も末子もだれが偉いということはない．こういう社会は双方制社会であって，我が国もこのようであった．中国と韓国は，女性が結婚しても姓がそのままの社会，つまり，部族社会である．

アジアは肌の色は同じで，一つであると思っても実はこのような違いがある．同じ水田が広がっていても，東南アジアの稲は日本のジャポニカ系とは違い，そこのインディカ系の米には「浮き稲」といって水位が上がるにつれて伸びていって5メートルぐらいになるものがある．

私たちが国際社会を生きていくためには楽天的に行動することが最も大切であるが，世界は異文化で成り立っているという自覚をもつことが前提となる．

私たちがもっている行動規範，価値基準は生まれ育った文化によって作られたものであり，私たち自身もいわば文化の所産なのである．だが，私たちはそのことを日常特に意識しているわけではない．外国語を学ぶことによって自国語を知り，外国の文化を学ぶことによって自国の文化への理解が深まる．そして自分自身もまた文化の所産であることに気付くようになるのである．異文化を学ぶことによって自らを客観的にながめることができるようになり，相手のことをよく分かるようになるのである．外国語は「外国を見る窓」であると言われるが，同時に「外国へ出て行く扉」でもあるのである．

国際社会に生きる日本人としてのアイデンティティの確立という国際的資質を育成し，異文化理解―いろいろな文化に対する柔軟で多様な見方を養い，同じ事象でも他の文化では異なっ

た意味をもつことを理解することができるようにすることが大切であるが，この問題は，英語教育よりは社会科教育のかかわりが大きいことは言うまでもない．英語科教員は日ごろ英語という英語文化圏の価値体系の表明である言語だけを教えているためか，狭い視野にとらわれがちといえなくもない．私たちは文化相対主義に立ち，人間は生まれ育ったその文化特有の行動規範，価値体系によってそのあり方を規定されていることを理解しなければならない．ある文化の一部だけを取り出してその優劣・是非を論ずるなどの愚を犯してはならないである．

注

1）西田龍雄『言語学を学ぶ人のために』（世界思想社，1986）p.149
2）小林薫「これが国際感覚だ！」『時事英語研究　1986－**4**』（研究社）p.33
3）林大『言語と思考の発達』（三省堂，1984）p.176
4）E.T.ホール，国弘正雄，長井善見，斎藤美津子訳『沈黙のことば－文化・行動・思考』（南雲堂，1972）p.p.10，11
5）ハーンはこの笑いを仏教と関係づけている。梅原猛は『哲学する心』（講談社，1977）のなかの「日本人の笑い」において，「大智度論」という経典をあげて，苦難に直面しての笑いについて説明している。
6）A.シュヴァイツル，野村實訳『水と原生林のはざまで』（岩波書店，1923）p.71　なお，密林の聖者とたたえられてきたA.シュバイツァー（1875－1965）は，一方でアフリカ人に対する「相手を子供扱いする態度」が厳しい批判の対象になっている。[中村敬]
7）矢野暢「日本はアジアの異端児だ」深田祐介『男のホンネ』（三笠書房，1988）p.202
8）中村敬『英語とはどんな言語か』（三省堂，1989）p.167
9）鈴木健二『人間の価値は何で決まるか』（大和出版社，1977）p.p.116，117
10）木村尚三郎『ヨーロッパの窓から』（講談社，1988）p.p.57，58
11）芳賀徹，平川祐弘，亀井俊介，小堀桂一郎『西洋衝撃と日本　講座　比較文学**5**』（研究社，1973）p.366
12）マイケル・プロッサー，岡部朗一訳『異文化とコミュニケーション』（東海大学出版局，1982）p.p.162，163，173
13）外山滋比古『外国語の読みと創造』（研究社，1981）p.73
14）柳父章「輸入情報処理」竹内啓『意味と情報』（東京大学出版局，1988）p.p.178－180
15）楳垣実『日英比較語学入門』（大修館書店，1985）p.183
16）金田一春彦『日本語の特質』（日本放送協会，1984）p.248
17）矢本貞幹『文学技術論』（研究社，1976）p.69
18）澤登春仁『英語的思考』（講談社，1990）p.46
19）宮本美智子，永沢まこと『アメリカ人の日本人観』（草思社，1982）p.100
20）前掲書18）p.18
21）H.Passin，徳岡孝夫訳『日本語の維新を考える　英語化する日本社会』（サイマル出版会，1982）p.5
22）クライド・クラックホーン，外山滋比古，金丸由雄訳『文化人類学の世界　人間の鏡』（講談社，1971）p.145
23）芹沢栄監修『英語教育の新しい展開』（開拓社，1981）p.218
24）国弘正雄『英語の話しかた　国際英語の時代』（サイマル出版会，1984）p.88
25）西山千『英語の通訳一異文化時代のコミュニケーション』（サイマル出版会，1988）p.208
26）森住衛「教室における「文化」の扱い」中村敬，森住衛『英語教育と文化』（三省堂，1984）p.p.68,69

27) 鈴木孝夫『日本語と外国語』(岩波書店，1990) p.p.60－71　英語の虹の色は6か7.
28) 古田暁『異文化コミュニケーション』(有斐閣，1987) p.87
29) 村山貞也『人はなぜ色にこだわるか』(ＫＫベストセラーズ，1988) p.15
30) 日本大辞典刊行会『日本国語大辞典 8』(小学館，1977) p.143
31) アト・ド・フリース，山下主一郎他等『イメージ・シンボル事典』(大修館書店，1984) p.510
32) 前掲書１) p.p.160，161
33) L.A.サモーバー他，西田司他訳『異文化コミュニケーション入門　国際人養成のために』(聖文社，1983) p. 232
34) 小林薫『ノンバーバル，コミュニケーション』『時事英語研究　1981－5』(研究社) p.26
35) 前掲書７) p. 207